



1993 年 (平成 5 年)

9 月号 (No. 580)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目 次

日本山岳会が包含する当面の問題点

について…………… 1

四カ国語の「北アルプス自然保護・

安全登山案内書」を作成…………… 2

東西南北

越後・坂戸山 第二回赤シャツ懇

親山行…………… 3

自然保護活動に活躍する九州岳人

…………… 3

山と自然の断章 (5)…………… 4

環境庁長官表彰を受けて…………… 5

ケルンの回顧…………… 5

自然保護随想…………… 4

支部だより…………… 7

山梨支部 岩手支部

報告

雪崩シンポジウム…………… 8

第二十四回丹水会・例会…………… 9

第二十一回山岳史懇談会「北大山

岳部の登山」…………… 9

海外の山…………… 10

図書紹介…………… 12

書籍・雑誌受入報告…………… 13

山岳会所蔵山岳地図目録…………… 14

新入会員 住所・住居表示

変更…………… 15

会務報告…………… 16

7 月定例理事会 各委員

会 '93 年度運営方針 ル

ーム日誌 お知らせ 会

員異動

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時

水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日

13時～20時

お知らせテラップ電話

3234
六六五九日本山岳会が包含する
当面の問題点について

会長 藤 平 正 夫

会長就任後、初の理事会(五月二十

八日)で、私の抱えている問題点を項
目のみ提示し、六月、七月の理事会で
時間をかけて、自由な討論をしていた
だいた。以下簡単にそれをあげ、若干
の説明をつけ加えることにする。

説明は問題意識の提示にとどめ、自

由な討議の中で(私の提示した問題点
のほかにつけ加えたものも含めて)九
月の理事会あたりで、一応の整理をし
たいと考えている。もちろん会員各位
の自由なご意見もお寄せいただきた
い。ただし、全員アンケート方式はと
らず、本部から直接支部の意見等も吸
い上げるつもりである。

■私が考える内外の問題点

①九十年事業

一九九五年十月十四日が九十年に
なる。この取り組みについて。

②組織改正と内部体制の整理

前会長のとき取り組んだが、どうも
徹底を欠いた結果となった。クラブと
しての具体的性格と整合性を考えなが
ら、各委員会の見直しや新しい有機的
な組織を考えたい。

③同好会グループ

数多くのグループが存在している
が、本部としていかなるサービスが提
供できるのか。

④支部について

組織が拡大すればするほど、本部と
支部との関係は難しくなるのが通例で
ある。当会でも既にその徴候を兆して
いる。

⑤若年層の強化

人口構成の変化や学校山岳部の空洞
化などの結果、当会の平均年齢は五十
四歳を超すようになった。やむをえな
いといえばそれまでだが、会の生命力
維持のためにも若年層強化を考えねば
ならない。これについては、むしろ若
年会員の活発な意見を期待し、それ
によって有効な対策がでないものだろ
うか。(この項目は考えながらも、つい
うっかりと書き落とし、理事会のなか
で問題提起され、追加したもの)以上が山岳会内部の問題だが、対外
的な問題としては次のとおりである。

⑥環境問題

近年急速に高まった環境保全の問題

は、当会にも大きな衝撃を与えた。ほ
んど山岳会内部の議論にとどまって
いた自然保護や愛好家グループに、大
きな社会問題となった環境保全が直撃
したのである。地方支部の問題もから
み、この対応に苦慮を重ねることが多
かった。日本を代表する当会の動向が
問われることが多くなってくるであろ
う。しかもこれは国際的な拡がりを持
つ大きな流れで、次に掲げる国際化と
からみ、いわゆる業際の問題でもあり、
組織的にも解決を強いられてきている。

⑦国際化対応

外国からの日本への登山者が近年激
増しており、各所で摩擦をおこしてい
る。受入れ体制の立ち遅れは明かであ
り、単に登山の問題でなく文化摩擦で
ある。またこれは必然的にJMA、U
IAAとの関係にもかかわってくる。
私の提起した問題点は以上だが、二

回の理事会を通じて、本部の事務所狹隘の解決、財政強化等もいろいろ議論された。

この際私の、これらの諸問題、ひいては山岳会の運営についての基本的考え方を述べておきたい。

■四年間の副会長経験から

大量の経常事務処理に埋没して、理事会の本来の機能が低下していたこと。いいかえれば基本的問題点と将来へつなぐ論議が全くなされたこととである。ナムチャや山研、HAT-Iなど巨大プロジェクトがあったにしてもである。

こうした認識から前述の問題提起を行ったが、私は壮大な長期計画は好まない。長年の会社勤めで計画が立派にできればできるほど、達成のための計画でなく見透かしになってしまつて、目標達成や問題解決の性格を失うことが多かったからである。むしろ個別の実行計画の積み上げが、より実務的であると思う。

柔軟性、弾力性を重視したい。こういう激変する状況のもとでは、画一的なこだわりをできるだけ避けて臨機の対応を考えたい。国際問題などは、まさに然りである。連絡を密にして、協調を旨としていきたい。会の運営の基本は、多様性を包含しながら会としての歩みの筋を通すことと考える。

四力国語の

「北アルプス自然保護・安全登山案内書」を作成

自然保護委員会

海外からの登山客が言葉や習慣の違いから戸惑われることがないように、自然保護委員会では英・中・韓・日、四力国語の北アルプス自然保護・安全登山案内パンフレットの作成を計画した。作成に当たっては、環境庁、山小屋協議会、豊科警察署との打ち合わせを行い、また中華民国山岳協会ともたびたび文書を交わし、目的に沿う簡潔

な文章を作ることができた。

環境庁では、これに地図を入れて印刷することを計画してくれているが、予算の都合で秋となるので、とりあえず自然保護委員会の経費で印刷し、次のように配布した。

山小屋関係は、松本側五〇〇部、富山側二〇〇部、高山側二〇〇部、中華民国山岳協会二五〇部、韓国山岳会未定(七月二十五日現在、送付先と部数の連絡待ち)。

これらは、各山小屋から外国人登山客に手渡され、また壁に額縁入りで掲示されることになる。さらに案内書等が作られる際には、原稿として使われる。台湾では各ツーリストに配布される

ることになった。韓国では、同国の山小屋に日本へ行くときの注意として掲示され、また航空会社で複製して乗客に配布するなどが検討されている。

今回は拙速で、このようなものとなったが、来年度はもっと魅力的な、記念品として持ち帰りたくなるようなものを作りたいと思っている。この機会に、日本人の登山者も例外なく、外国の登山客の模範となるようになりたいためである。

なお、この案内書は日本の新聞、雑誌に紹介されたが、一部には発表前の誤りのある原稿が使用されていた。本会報の内容が最終的に固まったものである。(大森弘一郎)

For foreign climbers who want to enjoy the Japan Alps



Welcome to the beautiful Northern Japan Alps

歡迎光臨日本美麗的北阿爾卑斯

Japanese mountains are beautiful, but very fragile. The nature of the soil is very soft. Now the number of climbers are increasing, so we have the "Nature Conservation Charter", and we are promoting to preserve nature. We wish you would join our movement and enjoy our beautiful mountains.

我們日本的山，美麗可愛，但土壤軟弱容易受破壞。登山人口增多，對於保護自然環境，我們大家制定一項「自然保護憲章」，希望各位登山愛好者，能踴躍參加這項活動行列，快樂地享受日本美麗的河山。

因此請注意下列夏季及冬季各八點事項(夏季登山部份)

8 REQUESTS FOR SUMMER MOUNTAINEERING

① Please walk on the trail and do not enter grass or flower fields along the path.
(Japan Alps are located in National Parks, and it is prohibited to enter any place other than paths, even if there are no signs or ropes.)

② Please don't pick any alpine flora. Please take a photo instead.

① 在山區要行走規定路線，請勿進入路邊草原或花圃
(日本の山，大部分均屬國立公園，未設禁止進入區域之處，和山登山步道以外均禁止進入)

上/案内書の部分 下/日本文採抜

(日本の山を楽しむ外国からのお客様のために)

美しい日本の北アルプスへようこそ

私たちの日本の山は美しい反面、土が軟らかく非常に傷つきやすい性質を持っています。登山者の増えた今、皆で「自然保護憲章」を作ってこれを守るように務め、その推進をしています。皆様もどうか私たちの活動にご参加下さり、日本の美しい山を十分に楽しんで下さるようお願いいたします。

そのための「八つのお願い」

〔夏山用〕

- ① 山の中では決められた道を歩き、道のわきの草原やお花畑に入らないようにお願いします。
- ② 高山植物を採らないで下さい。花は写真に撮ってお持ち帰り下さい。
- ③ 余った食料やゴミは、残さず、お持ち帰り下さい。もちろん煙草の吸い殻も。
- ④ 天幕はテント指定地に張って下さい。
- ⑤ 稜線の小屋の水は天水で貴重品ですから大切に、また水場は汚さないように。
- ⑥ 山の中のたき火は厳禁です。山小屋での火の始末も確実にお願いします。
- ⑦ 各山小屋の消灯時間を守って下さい。
- ⑧ 非常のときのために登山届けをお出し下さい。保険には入っていますか。

〔雪山用〕

- ① 冬の北アは非常に厳しい世界です。
- ② 冬山は夏山とは全く違う山です。
- ③ 厳冬期には山小屋は閉まっています。入れません。
- ④ 登山ルートは地図の登山道と全く変わります。
- ⑤ 山小屋の屋根には上らないで下さい。
- ⑥ 雪山では、何も残さないで下山するよう特に気を付けて下さい。
- ⑦ 入山前に届けを県警本部に必ず出して下さい。
- ⑧ 山岳傷害保険に加入していますか。

複製歓迎・出来るだけ四力国語を並べてお使い下さい。(財)日本山岳会

東西南北



越後・坂戸山 第二回赤シャツ懇親山行

坂倉登喜子

早春の巻機山麓清水村は春を待ちわびて芽生えた草木や、雪の下から萌え出たばかりの山の幸が、また今年も私たちを迎えてくれた。

去年、第一回赤シャツの集いを山梨の四尾連湖畔で催し、翌日蛭ヶ岳に登って親交を深めた人達と、第二回は去る五月八日に越後清水「雲天」に一泊して、坂戸山へ登った。今回はエーデルワイス・クラブで長年続けて恒例になっていた、山菜に詳しい片岡先生のご指導による山菜山行と合同で行った。

第一日は越後湯沢駅からマイクロバスに分乗して、清水の「雲天」民宿に行く。いつもなら近くの河原で野外の昼食をするところだが、今年は残雪が多くて山菜も少し下流の場所が採れるということと、車道を歩いて左側の草原へ、民宿のご主人小野塚さんの案内で着いた。人数が多いので五組に分か

れて、揚げたての新鮮な山菜天ぷらを食べながらビールで乾杯して、天ぷらパーティーを催した。残雪の山々を仰ぎ、キクザキイチゲやカタクリ、フキノトウの咲く青空の下での昼食は最高の饗宴だった。

今回は地元新潟支部の曾根さんがあとから車で来て下さり、ビールを寄贈していただいた。宿に戻って夕食時には山田智子さんから「越の寒梅」を、民宿から「八海山」を、また片岡先生手作りの果実酒など、飲み物も山菜料理もたくさん出て、食べきれないほどで大満足だった。食後、片岡先生の山菜の説明や自己紹介などをして、最後に石崎さんのハモモニカの伴奏で「荒城の月」を歌い、「今日の日よさようなら」を合唱して就寝。

翌五月九日、巻機登山組は午前四時頃出発。坂戸山組は九時二十分頃、宿からマイクロバスで六日町駅に荷物を預けて登山口まで乗り、曽根さんに途中まで案内していただき、一行二十四名で出発した。当日は無風快晴、低山ながら階段の急坂では暑くて、汗だくの登りを休み休み息を弾ませて、ようやく二時間半で頂上着。富士権現神社付近はカタクリの群落で、皆歓声をあげ、疲れを忘れた。

山頂で昼食後、早く下山する三人を見送り、私達は一時半、ゆっくり二オ

イコブシ(タムシバ)、アカヤシオツツジ、ジュウニヒトエ、イワウチワ、イワカガミ、マンサクの花などを見ながら登山口に下山。再び迎えてくれたマイクロバスで湯沢駅に着き、解散。

なお例年の片岡先生指導による山菜採集山行は、二日目も民宿ご主人の案内で雪の消えた低い場所まで行き、たくさん採集できた。大喜びで早目にもどり、二時頃出発して湯沢駅に着いたら、先発の坂戸組にばったり会って一緒に帰った。坂戸後発組が湯沢駅で休憩しているところへ巻機組が下山してきて合流。お互いに残雪と花の山歩き

の感激を語り合い、早春の越後の自然に触れた喜びと無事を祝って、最後の乾杯をし、一緒に帰京した。

今回の山行は魚沼新報の取材を受け五月十四日に写真入りで掲載された。参加者 日本山岳会二十二名、エーデルワイス・クラブ他二十一名、合計四十三名。(石崎さんの連れてきた犬ケン一匹)

自然保護運動に活躍する 九州岳人

山田 格

九州地区山岳会のいくつかの団体から、自然保護をかねての山行に、偶然

参加の機会を得ました。自由参加です。その主なものを列挙します。

■九州脊稜の原生林を守る協議会
日本各地からの参加者約百名。一日目は白鳥山のブナ原生林の現状視察。二日目は国見岳のブナ原生林の現状とクマタカの生存確認。

宮崎県側ブナ林は稜線間近まで伐採され、植栽復旧でも数百年はかかる。白鳥山周辺上部の自然林は健在であった。後日この会が中心となり、現地営林署に申し入れたが、伐採範囲を縮小するとの連絡があったとのこと。おかげでこの地域の自然林は助かりそう。

国見岳の熊本県側にいくらかのブナ原生林、これは助かりそう。その関係でか、輪を描く四羽のクマタカを目視。この山域は渡り鳥の休憩地で、密猟やシャクナゲの盗掘も多いところである。

■大崩山登山道路建設に反対の会

祖母傾国定公園の南端にあり、一帯は「森林生態系保護地域」に指定されている。大崩山の祝子川側の谷々は、深い断崖渓谷と奇怪な岩塔群が連続していて、九州では特異な地域である。

最近地元自治体が、山村活性化林業構造改善事業、予算六、三〇〇万円で現在の林道を、和久塚岩塔直下の七合目まで延長拡張して全面舗装し、終点に駐車場や展望台を造って観光客を誘致、老人や子供でも和久塚登山ができるよ

うに登山道も整備する計画である。

和久塚までは健脚者で三時間かかる岩壁まじりの急斜面の照葉樹林帯だが、観光道路が完成したら自然破壊は確実だろうと、延岡山友会や自然保護関係者が反対運動をしている。しかし組織が小さく、押し切れそうだ。大崩山に登ってみて、この自然だけでもそっとしておいてもらいたい……とは私のエゴか？

■九重連峰の混雑と坊ヶツルのわだち跡

私は十回ほど九重に入った。当初は素晴らしい山域だったが、「やまなみハイウェイ」ができてから急速に破壊が進行して、現在は目を覆いたくなる。先日ミヤマキリシマの平治岳に登ったが、この山だけでも数万の人数で大混雑。山麓の道路は大渋滞。坊ヶツルの草原は車のわだち跡が目立つ。ここに通じる大船林道は、山麓にゲートはあるが、温泉小屋などの資材運搬車は通行できる。当然、新奇を求める車運転族が進入、国立公園を荒らし回る。

……この林道は廃止し、営業小屋への物資運搬はボッカかへりに切り替え、その費用は宿泊者が負担すべきであろう。とはその夜、環境庁・長者原ビジターセンターでの、阿蘇九重自然保護山の仲間の懇親会での討論であったが、地元民の生活に直結することだけ

に、結論はでなかった。参加は、天草山の会など、熊本、大分、佐賀、長崎に地元関係者で約四十名。

■諫早湾干拓工事と渡り鳥対策

干拓の是非は、工事が進行中なので議題から外し、干潟を中継地としている渡り鳥の今後と、繁殖地の確認。参加者にその道の専門家がいて、現況と今後の対策などの説明があった。

その他に天草西海岸三県観光道路など、自然環境破壊につながるような話もある。いずれにしろ、中央では気づかぬ自然破壊の計画が目白押しで、それを押し止めようとしている人たちも大勢いることが判って心強くなった。

山と自然の断章(5)

岡村治信

■浅間尾根

奥多摩の浅間尾根は、春になればいたるところに山吹とつつじの花に飾られた一時期を迎える。様々な花の色が命の限りに燃え盛って、これまた燃えるような新緑の中に点綴している光景は、それを描写しようとするすべての人に、その能力の不足を思い知らせるに十分であろう。そしてもし落葉松の森に、清純な若葉の芽が一斉に萌え出ているのと併せ観賞するならば、誰し

自然保護随想 知識と行動は別？

関塚貞亨

自然保護協会は、多くの人に自然

の仕組みを教えて、環境問題への関心を持ってもらうために自然観察指導員を養成する講座を開いている。十年ほど前になるうか、数人の自然保護委員と一緒に、武蔵御岳で開かれた東京地区の講座に参加した。

御岳神社の宿坊の講堂で開かれた講座のほか、男女ほぼ半数の参加者が十人ずつの班に分かれ、それぞれベテラン指導員に連れられて、神社近くの公園で野外実地講習と、参加者がそれぞれ実習の成果を披露するテストが行われたが、その野外講座の参加者の行動に不思議なことを発見して、いまだにどういうことか分らないでいる。

公園の道は幅二メートルぐらい、ベンチのあるところは幅十メートルぐらいの広場に裸地化してある。講師は広場へさしかかると話を始めるので、実習生は講師のまわりに集まり、広場一杯に広がって歩かかたちになる。公園は、人があまり歩かないとみえて、イタドリなどの野草が、道や広場の一部を侵蝕しはじめているが、実習生たちは、ある人は野草や若芽をまたいだり、よけたりしながら歩き、ある人は無頓着に野草を踏みしだいて、歩いていく。

よく見ると、野草をよけて歩いている人も、意識してまたいでいるようには見えない。半ば無意識に行動しているようで、無頓着に一定のリズムで歩いている人と同様に、講師の話を熱心に聞きながら歩いている。自然観察指導員の講習を受けようという人たちだから、自然や環境に無関心なはずはない。知識も水準以上であろう。それでも三分の一の人は、道の野草を踏んで気がつかない。男だけではない。女の人にもいたから、性別は関係ない。どうしてそうなるのか不思議で、いまだに考えている。

山路を歩いていて、蟻や尺取虫をよける人と、無頓着に歩いている人と、どちらが環境問題に熱心かは別の問題のように思う。道の草や虫に無頓着な人がトラスト運動や、プナ基金の金集めに功績をあげたりするから、人間という存在は複雑である。

もそのみごとな色彩と自然の生命の饗宴に、われを忘れるに違いない。

私ももちろん、そのような時に沸きたつ情感をどう説明してよいかわからない。いや、強いて説明することじたい不可能であり、不要である。ただ心の底から自然の息吹に融合し、共感して、その生命力に触れられるだけで十分である。そしてその情感が、どのようにに高く美しいものであるかは、それを一度でも真に味わったことのある人々の間では、何らの表現をも必要とせずに、むげに無限に融合しあうのである。

■自然は山で輝く

われわれが日常の「文化生活」に追われているとき、身のまわりの「自然」にあまり関心をもちたない。そんな乾いた心にとまる「自然」は、せいぜい路傍の花であったり、たまに飛来する野鳥であったり、樹間を洩れる月の光や窓をうつ雨滴であったりする。それらもろもろの自然は、統一もなくそれぞれが一つ一つの自然であることを人に訴えはしても、それ以上のものとはなり難い。

けれども、山に入って、日常の煩雑さと絶縁したとたんに「自然」はがぜん、その人のために勢いづく。鳥の声は軽やかに永遠を謳い、川のせせらぎは悦びに満ち、草や木も、地に伏した

病葉^{やまは}さえ深い生命と意味を語りかける。しかも彼らはわれわれに、人間は自然によって育まれ、かつ自然によって生かされていることを教えてくれる。この不思議な啓示はいったいどこから来るのであろうか。それを見極めることは、人間の知恵を超えたことである。ただ言えることは、ふだんの雑然とした個々の「自然」が「山」によって集約され象徴されるとき、すべてが整然とした体系のもとに総合的に存在するにいたり、同時にほんとうの自然の英知と美しさが輝きはじめるということである。

■年を忘れる

中央アルプスの横尾岳から木曽殿越(峠)に急降下したところに山小屋がある。その屋根を真下に見ながらようやく峠に降りたところ、山小屋の主人らしい人が一生懸命こちらを見上げている。いよいよ近づく、彼は私の顔を上げしげしげ見つめながら声をかけた。

「いま通って行った三人パーティーの話だが、この上を一人のじいさんが危なっかしい足どりで降りて来る。ささと追い越してきてしまいましたが大丈夫かな、といかにも心配そうだったので、わしもちょっと見にきたところだ」

私はなにげなく答えた。「ほう、そんなおじいさんがいたかなあ。ぼくは見

けなかつたよ」

すると彼は声を大きくして

「お客さん、あんたですよ。あんたのことを言っているのですよ」

これには返す言葉もなかった。山に入ればすっかり年齢を忘れ、昔と同じペースで歩いているつもりだけれど、他人が見るとそんなに心もとなく感ずるのだらうか。——時計はまだ十二時をまわったばかりだったが、その日はこの山小屋に泊まることにした。それはこの小屋が出してくれる「特製冷やしラーメン」に惹かれたからで、それ以外の理由は何もなくあった。ほんとの話である。

環境庁長官表彰を受けて

藤平正夫

どうした風の吹きまわしか、第三十五回自然公園大会で標記の表彰を受けることになった。山口県秋吉台で七月二十八日授賞式(欠席はまかりならぬとのこと)、今回は特に皇太子、同妃殿下が臨席されることになった。

どうしても両殿下を拝見したいというので家内同道となった。富山からの長い道のりで、だいぶ疲れて二十七日湯田に着いた。

翌二十八日は、前日に引き続いての

豪雨で、雨に煙る秋吉台は展望にささか欠けていたが、緑の草原はガスの合間にも、その美しさを見せていた。式典は両殿下ご臨席のもと、太鼓と吹奏楽のアトラクションを皮切りに始められた。

豪雨の中、両殿下とも大変のご様子であったがアトラクションも大変で、参加した少年少女が気の毒であった。長官表彰は団体二、個人七。見た顔だと思ったら「五千尺」の藤沢さんも個人の表彰者であった。知事表彰は団体三、個人六であった。

午後五時から六時までレセプションがあり、両殿下が受賞者のテーブルを中心にまわられ、個別にお言葉を交わすことができた。新築なった山研への両殿下のおいでをお願いしておいた。帰路は久しく怠っていた家内へのサービスとばかり山陰路をまわり、皆生では港さんをはじめ支部の幹部の方々と懇談することができた。

ケルンの回顧

中井修二

私の奥秩父への山旅は、いつも気ままな独り旅が多いが、これもその例に背かない、かつての紀行(昭和五十二年四月二十九日)のよみがえりである。

今日は天皇誕生日で、同期の友の五人に、春の叙勲が発表された佳き日である。私は早朝、出かけの途中、前後書きそなえた五氏宛ての賀状を郵便ポストに入れ、清々しい気持ちで駅へ向かった。

コースは曾遊の地、三峰山から雲取山へである。三峰山麓の大輪からケールカーに乗り継いで山頂駅着。歩き出す前に、東方の山なみ妙法岳に鎮座する三峰神社奥宮に遙拝した。

西参道の杉並木道を進み下り、東参道の大鳥居前に至ると、土産物屋付近のサクラが満開に咲きほこって美しい。この辺りの標高は一、一〇〇メートルあるから、里で花酣となってもサクラの蕾はかたく、花の咲くのは一か月くらい遅れ、四月末から五月上旬で、ちょうど開化前線が上ってきたのだ。サクラはどこにもある花だが、四季の流れの中でも、この花ほど私たちの心に深く食い入っている花は少ないと思う。花見といえばサクラに限定されるくらい、誰でも待ち焦がれるものであるから、幾度花見をしてもよいものだ。私はこの三峰神社には何回も参詣にきているのだが、サクラの花との巡り合いは初めてで、今日の山行にこよなしの思い出として印象づけられた。

杉林の中の山道を登って、左に妙法岳の分岐を見送り、地蔵峠に着く。一

体のお地藏さんが山路を行く人たちを見守るように分岐点におわします。左へ行けば大血川溪谷にある名利太陽寺への下り道、右道は僅かの上り下りで眺望のよい霧藻ヶ峰に出る。立派な休憩所と売店がある。この霧藻ヶ峰についての記述は少し昔にさかのぼる。

昭和八年八月に秩父宮殿下は妃殿下とご一緒に三峰山に登られ、昭和六年に建てられた貴賓館（秩父宮記念館）に六日間ご逗留された。その折、当時は燕岩と呼んでいた標高一、五二三メートルのこの山に妃殿下とご同伴で登山された。当時、この付近一帯は美しい原生林で、巨木の枝には霧藻が多く寄生していた。無名峰であったこの山を「霧藻ヶ峰」と呼んだらと宮殿下が命名されたのである。

宮殿下は昭和二十八年一月四日鶴沼のご別邸で逝去されたが、山の宮様とお慕い申し上げていた岳人たちが図って、宮様の記念碑を建てることになった。奥秩父の山で最も宮様にゆかりの深い、この霧藻ヶ峰の山頂の岩壁に胸像のレリーフ（作者は北村西望先生）を設置し、秩父山岳連盟により昭和二十九年七月一日に妃殿下のご臨席を得て除幕されたものである。その後奥秩父の山開き式は毎年六月一日、この記念碑の前で開催され、三峰神社神官により山行の安全祈願が行われている。

コースのお経平、前日岩、白岩山を過ぎると芋ノ木ドック付近からは深い原生林地帯となり、やや下り気味に下るが、樹林に妨げられて眺望は得られない。大ダワに近づいた頃から天候が崩れだし、東北方から黒い雲が押し寄せ、雷の遠鳴りが聞こえた。山の午後にはありがちの兆候で、雨具を着け、大ダワからは雲取山荘への近道となる尾根通しの急坂をあえぎながら登る。

刻一刻と迫ってくる寒冷前線か、冷たい風が吹き出し、大きな雹が降ってきた。雷鳴も近くなり、気はせくが、疲労も加わり、足運びも意にならない。電は十分くらいで雪に変わり、雷も遠のいたのでホッとした。雲取山荘に着いたのは午後三時三十分。雪は降りしきり、四囲はたちまち白一色の清浄な幻想の世界となる。山荘前の針葉樹林は春雪に重そうに枝を垂れる。約二時間雪はやみ、数秒積った。山荘に宿泊の若者たちは、予期しなかった雪に喜びはしゃいでいる。

気温はかなり低くなったので、夕食後は早く寝床につく。ひと眠りしたのか、寒さでか、ふと目を覚ます。「明るい！おや、もう朝か」と腕を見るとだ十一時、時計は止まっていけない。ガラス窓からの月光だ。雪に反射した月の明りが小屋内に流れ込んでの明るさだった。私は起きて用足しに外へ出る

と、雪冷えに身ぶるいした。こうこうとした月光と春雪との接合を山小屋で味わったのだ。月は満月ではなく、いくらか欠けていた。帰宅後に暦を見たら旧暦三月十二日の月であった。

三峰から雲取への一日の山行で、午前は三峰のサクラ、午後は雲取近くで雪、夜は月という自然の三部作に巡り合ったことは、私の山旅では他に例がない。再び巡り合えない一期一会の自然の魔術に邂逅した喜びは、冥加に尽きる。

明くる三十日。清々しい朝を迎えた。五時三十分山荘を立ち、前日の雪を踏んで原生林下を約三十分登って雲取山頂（二、〇一八メートル）に立つ。雪は朝日にきらきらとまぶしい。私はいつもの慣わしで、山頂におけるセレモニーとして、小石を一つ拾ってケルンに積み上げてから、連山を展望する。そして気づいたのは、秩父連峰で降雪があったのは一部の山のみで、その中に雲取山が含まれていたことだった。自然現象ではあるが、私には幸せなことで、ケルンに敬けんな思いを馳せた。

雲取山頂から南へ下り、七ツ石山に登り、石尾根の鷹ノ巣山、六ツ石山と雪解けた山道を駆け下って、奥多摩駅に着いたのは午後一時であった。この山行で得た雪・月・花の情景は忘れられない。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

山梨支部

張り切って全国大会の準備中

山梨支部も支部員七十九名になりました。今年度の全国支部大会をお引き受けするにあたっては、低迷から脱出しつつある時期なので、もう少し時間をおいてからという意見もありましたが、むしろこの機会に支部の総力をあげることに、一体化がはかれるのではないかという意見が大勢を占めました。

開催については、八月号にも掲載しましたが、時期は十月二十三日(土)二十四日(日)、奥秩父瑞牆山周辺で開催されます。また、毎年同時期に開催している『本暮祭』も地元須玉町の協力を得て行います。

七月十七、十八日に、予備調査のた

めの集会を、建設されたばかりの「ミズガキ山リーゼンヒュッテ」で、十九名が出席して行いました。準備は順調に進行していますが、これからが正念場です。関係諸団体との折衝もこれからが本番です。出席者全員に喜んでもらいたいと、支部員一同張り切っています。

山梨県山岳連盟の、アムネマチン峰(六、二八三才)登山隊に五名の支部員が参加しています。七月二十一日に甲府を発って、八月二十一日の帰国予定日までの一か月間、登頂成功のニュースと全員無事の帰国を願っています。では十月、錦繡の瑞牆山でお会いしましょう。(田村英也)

岩手支部

最近の活動状況

●秋の例会 平成四年十月三日、岩泉町安家のかむら旅館で開催。望月達夫、浅野孝一両氏のご出席をいただき、十五人が集まった。参加者一同の期待も空しく松茸は不作であったが、七種類の茸料理を味わった。

翌四日は、宮古の会員渡辺さんの先導で、紅葉の美しい野辺山に登った。最後のほうを歩いていた諏訪さんが林道端で舞茸を見つけた。

〔幹事〕鹿野、渡辺、須々田。

●第一回青森ウエストン祭が十月十日青森県新郷村で開催。明治三十五年の北東北大凶作の年に、牧師ウエストンが食料や物資を携えて救援にきてくれたことを記念したものである。JACの青森支部がまだできていないので、岩手支部長中谷が会長代理で参加した。今後は五月の最終日曜日に開催されること。

●岩手支部として昭和六十三年に「かぬか平の山々」を発行したが、続編を発行することになり、十二月十一日に第一回編集会議を開催した。編集委員は田鎖を中心に、中谷、佐藤(紀)、宮、松田があたることになった。書名は「続・かぬか平の山々・二上純一氏遺稿集と共に」と刷る。赤字を出さないために支部会員などの予約を取って、その部数のみの限定発行にすることとした。

●平成五年総会等を三月二十八日午後、盛岡自治会館で開催した。始めに上野幸人会員のヒマラヤ遠征の報告があり、その後総会をもった。参加者は二十二名。諏訪会員の議長の下で議事を進め、委員の改選を行う。支部長に中谷充、副支部長に菊池修身を互選した。

〔幹事〕宮、立花。

●春の例会。四月十七日、胆沢町金ヶ崎温泉に十七人が出席して開催。翌十

八日は堅い雪の上を辿って、夏油三山の駒ヶ岳に登った。

〔幹事〕菊池(修)ほか水沢の会員。

●五月二十一日「続・かぬか平の山々・二上純一氏遺稿集と共に」完成、発送。

●夏の例会。七月十日、夏油温泉国民宿舎夏油山荘にて開催。十七名参加。

岩手医大高次救急センターの安井豊さんから、中高年登山者の問題点と救急法について、スライドと実技をまじえて講演をしていただいた。大部分の参加者が中高年であり、真剣に聞き入っていた。翌十一日は時に小雨の中を夏油三山の一つ、牛形山に登り、夏油の露天風呂で汗を流して解散。

〔幹事〕高橋(俊)、高橋(博)(中谷 充)

□ご意見をお寄せください□
本紙一ページの藤平会長の提言に対して、会員の皆様の自由なご意見をお寄せください。宛先は会報編集室です。 編集委員会

□資料寄付のお願い□

登山の用具、記録など、整理するときに考えてみてください。他に寄付する前に山岳会へ。捨てる前にも再考を。 資料委員会

報告

REPORT

雪崩シンポジウム

若年層の参加者も真剣

科学研究委員会

平成四年十一月二十八日(土) 十時から十七時まで、青山学院大学会議室において、雪崩遭難防止のためのシンポジウムが開かれた。参加者は九十六名、冬山シーズンを前にして、若年層の聴衆も多く、盛会であった。徳久委員長の後、午前中は中村、午後は大蔵の司会で進化した。

詳細については、科学研究委員会編集なる予稿集「雪崩シンポジウム・92年」(頒価五〇〇円)を参照していただきたいが、ここではその概要を報告する。

■登山者のための雪崩学

日本氷雪学会理事・雪崩分科会長

新田隆三

雪崩遭難をなくすには、まず気象や雪質、雪崩についての基礎知識が必要である。雪質の分類では、シモザラメ雪やコシモザラメ雪の説明がなされた。これらが積雪層内の弱層をしばしば形成する。雪崩の分類では、点発生、面発生、スラッシュの解説が行われ、

梅里雪山雪崩の運動モデルの計算から、テントサイトや休憩地がどんな状況で雪崩に直撃されたかも示された。強調点として、行動前の弱層テストの重要性となだれやすい地点では薄氷を踏む思いの慎重な前進と、間隔をあけての行動などがあげられた。

■雪崩事故の教訓から

日本勤労者山岳連盟(労山) 遭難対策委員 中山建生

横尾尾根上部の一月の雪崩事故(死亡一、重傷七)や八ヶ岳中岳沢の三月の雪崩事故(死亡十二)などの分析結果の報告であった。「せっかくここまできたのだから」行けるところまで「などの心理に影響されることなく、弱層テストや風雪、積雪などの判断を冷静に行って、安全なスケジュールを採択すべきである。

これには雪崩の知識や冬山の経験も必要で、リーダーの責任は極めて重い。遭難体験者は、周囲への迷惑もあろうが、将来の事故防止のため、ぜひ正確で客観的な報告を残してほしい。

毎年一月、労山では雪崩事故を防ぐための実地講習会を中央アルプスで実施している。数分以内に埋没者を掘り

出す方法や、窒息より危険度の高い低体温症(32℃以下)者の救急法も体験できるので、できるだけ参加していただきたいということであった。

■雪崩現場での捜索

労山技術委員・雪崩講習会主任講師 松葉桂二

雪崩が起こった場合の捜索救助法の第一点は、三種の神器ともいえるべき、ビーコン、シャベル、ゾンデ棒の携行である。ビーコンは今回我が国のワーム社がAB1500を開発した。千五百時間作動し続け、二次雪崩対策用自動発信器を内蔵している点有効である。会場ではこれによる発見テストが行われ、三十秒程度でつきとめられた。掘り出しについては、前記雪崩講習会における深さ二層の埋没者掘出し作業のスライドが紹介され、私どもに感動を与えた。

第二点は雪面に呼びかけたり、雪面に耳をつけて音を聞く、スカッフアンドコール法や人工呼吸法の体得、あるいは事前の緊急通信網の設定などである。埋没者の発見に、訓練された雪崩犬が有効との実験結果も報告された。

■雪崩遭難をなくすために

日本山岳会・雪崩対策委員 松永敏郎

冬山へ入る人々の心構えから、遭難を起こした場合の家族や現地関係者に

与える影響についての配慮まで、数々の問題点が指摘された。冬山については、たくさんの方の知識を得るとともに、積極的に経験を積んでいくなど、厳しい努力が必要であること、特に雪崩の危険の多い降雪中や風雪時には行動せず、ひたすら待つことの重要性などが強調された。

■パネルディスカッション

最後に四名の講師がパネリストとなり、数々の質問に応える時間が設けられた。

集中した質問は、弱層テストによる雪崩の危険性の判断法に関するものであった。弱層はシモザラメ雪層であることが多く、これはピッケルを刺しただけでは安心できない。このため実地でのテストの実施と、その日の雪崩状況の観測が必要であるが、同時に気象や地形との関連にも配慮して、経験を深めることが望ましい。ビーコンの取り扱いや掘り出し法についても練習は必要である。

一方日本の冬山と氷河地帯やヒマラヤの高所とは、雪崩の様相が異なり、国内でも、低温時とミゾレなどが降る時節ではまったく異なる。

これらの問題に対応するためにも、このようなシンポジウムを続いて開いてほしいとの要望があった。

(中村純二)

第二十四回丹水会・例会

草鞋ばきで雨中の沢登り

五月二十九日(土)、水無川・滝沢園(丹沢)に六十余名が参加して、第二十四回丹水会・例会が開催された。古谷幹事の司会で開会。恒例の講演会は漆原俊氏を講師に、武田久吉先生とのこと、当時の丹沢、尊仏小屋のことなど貴重なお話をいただいた。彼は昭和八年十二月秦野山岳会創設者の一人である。

懇親会は屋外でのバーベキュー。各自持参のアルコールで夜遅くまで旧交を温めあった。

三十日は天気予報どおりの曇り空。記念撮影をして、三ノ塔尾根組(十八名)と、葛葉川本谷組(二十二名)に分かれて車で出発する。沢組は途中尾根組と分かれて九時十五分合いに着く。ここで草鞋に履きかえ、九時五十分、滝沢リーダーをトップに、渡辺玉枝リーダーをラストに出発した。草鞋は初めての人が多かった。

小雨の中、次々に現れる小滝を全員快適に登って行く。念のために持参したザイルは必要なかった。板立の滝を登ったところで雨足が強くなり、沢登りを断念して林道に出た。雨中の小休

止後、二ノ塔尾根を二気に下り、出合いに戻った。午後一時、秋の再会を約束して散会した。(小川雅庸)

第二十一回山岳史懇談会

「北大山岳部の登山」 ―戦前の回想を主として―

図書委員会

今年の山岳史懇談会は、札幌から北大OBの朝比奈英三、橋本誠二の両氏を講師に迎え、二月二十六日夜、ルームで図書委員の南井英弘氏の司会で開催された。

講師のお二人はともに本会会員(橋本氏は名誉会員)、昭和十年代のご卒業とのこと。両氏の淡々と語られる、旧制北大時代の山岳部の活動状況と雰囲気は、旧制高校的なリベラリズムと大学山岳部の質の高さ、アカデミズムなどの長所を合せ持ち、さらに年齢層にも厚みのある、理想的な山岳会の一つの姿と受けとられた。

当時の北海道の手付かずの大自然に恵まれた環境と、予科・学部六年の年齢幅の現役学生のために、戦前の北大が自然科学系であったため、多くのOBが大学の研究室に在籍して現役と行動を共にできたことが、実に羨むべき雰囲気をつくりあげ得た主な要因であろう。

■北海道の山々を冬期初登頂

年代を追って、まず明治四十五年に創立された大正時代のスキー部の歩みから、大正十五年のスキー部からの山岳部の独立の経緯、さらに昭和十年頃までの活動を朝比奈氏が概説されたが、詳細な部史は創立五十周年記念誌にまとめられているとして、当夜の話題の中心は、北大山岳部のイメージ、特に他の学校山岳部と異なる点におかれた。

自然要因がまずあげられる。地理的、気象的特性により、北海道は北緯たかだか四十一度から四十五度にあるにもかかわらず、冬期は寒冷で氷雪に富み、山地の植物相は本州に比べて八〇〇から一、〇〇〇以上の高い地域のそれに相当する。また、日高山脈には数多くの氷河地形が存在しており、二、〇〇〇前後の山々が本州中部山岳の三、〇〇〇以上の山に匹敵する高度な登山の対象となっている。さらに開発が遅れているために、本州に比べてはるかに豊かな自然が山域に残されていたという人為的要因もあった。

戦前には、本州の登山グループでは、大正から昭和初期にかけての慶応大学山岳部の数人を除いて、ほとんど北海道

道の山を目指す者はおらず、したがって、北大山岳部は日本の二十二都府県を占める面積の島の山々をほとんど独り占めに、特に冬季の初登頂をほぼ完全に自分たちで果たしてきた。

大島亮吉ら慶応の人たちがトムラウシや石狩川源流に入ったのは、五万分の一地形図のできる少し前のことだったが、秀サン(伊藤秀五郎氏)山岳部発足時のメンバーが彼らの心境を「英国人のコーカサス遠征の心境」と評したエピソードが当時を物語っている。

■北海道の自然が許した自由な気風
山岳部の気風は、部の創立以来伝統的に続いており、団体登山に必要な協力、献身、融和の精神を身に着ける一方、個人としては非常にバラエティーに富む登山思想を持ち合わせていた。登山はあくまでも自主的な行為であるとの考えから、部員相互の関係は極めて自由で、好きな仲間が集まって山へ登るといふやりかたが、最も普通の山行形式であった。したがって部員の中には困難な高峰を求める者から、低山逍遙の愛好者まで様々な者がおり、前者であっても、沢から尾根へ、尾根からまた未知の沢へといった放浪の旅を愛する者が多く、北海道の奥深い自

今年もさくらんぼで会いましょう

然が、それを許していたともいえるであらう。

夏山から入り、次第に積雪期へ移るという学校山岳部の一般的傾向とは逆に、北大では冬山が先行していた。これはスキー部が前身であったことと、道内の山々には夏道がほとんどなく、また一、五〇〇呎以下の部分がチシマザサに覆われて、夏期のアプローチを極めて困難にしていたことに起因している。大正二年に厳冬の富士に初登を果たした人たちは、スキー部のスキー登山グループに属する人たちであったし、後に学習院から北大に進んだ板倉勝宣もこのスキー登山グループに属した。

山岳部発足後もスキーの人たちが多く、スキー登山が先行したが、一方、スキー技術への依存度が強過ぎ、これが後に昭和十四年の十勝岳、および昭和十五年のベテガリの大遭難へとつながったと反省されてもいる。

■本州の岳人との交流は密

北海道にありながら、本州の岳人との人脈は濃かった。特に京大とは京大農学部が発足時に、北大から木原均教授が移られて以来親密となり、その関係は今も続いている。(山岳部へ加わらなかった加納一郎は逆に京都一中から北大に進んだ)

東京からは前述の板倉、さらに板倉

海外の山

ハン・テングリの異常な夏

江本嘉伸

長い山麓の道を、大勢のポーターに荷運びをまかせ、あたりの風景の変化を楽しみつつ、ついでに高度順化しながら、ベースキャンプにたどり着く。それがこれまでのヒマラヤ登山のパターンだった。旧ソ連の山では、そんな悠長なことは許されない。トラックとヘリコプターでいきなりベースキャンプ地に運ばれ、登攀が始まるのだ。時間の節約とアプローチの簡略化という点では、これは現代的な方法と言える。ただし、気をつけなければならぬのが、高度対策だ。

田部井淳子を隊長とする「ハン・テングリ登山隊一九九三」の九人(うち女性七人)は七月二十六日、カザフ共和国の首都、アルマータから、東へトラックで四〇〇キロ走り、まずエーデルワイスが咲き乱れるカルカラと呼ばれる大草原に行った。七十ほどのテント、コンクリート作りのトイレなどが、整備されている。

ここで、四人のガイドと共に高度順

化のため近くの三、〇〇〇呎峰に登った後、ヘリで三十分、いきなり南イニルチェク氷河の国際キャンプBCまで運ばれた。高度四、一〇〇呎。モレーンの上に、遠来の客のために作ったと思われる素朴な小屋と食堂、そしてサウナが用意されていた。目の前には、ポベード峰(七、四三九呎)。天山山脈の真つただ中で、サウナに入って氷河湖に飛び込む贅沢は、ほかではできない。

モレーンを五、六時間歩くとC1に着く。ここからC2までは、途中のビルディングのような氷塔が崩れやすく、早朝に通過しなければ危ない。

C3へは、広い雪原を行く。高度五、九〇〇呎。ここには、テントのかわりにいくつもの広い雪洞が掘られていた。自信あるパーティーは、ここから頂上へアタックするが、スピードに欠ける田部井隊は、もう一つのキャンプを出すこととなった。古いザイルが固定された岩稜をたどり、六、四〇〇呎の狭いプラトリーにC4。

もともと計画を知って何となく集まった寄せ集め隊である。自己申告で、調子のいい者と悪い者の二パーティーに分かれて行動することになっていたが、この方法は問題だったようだ。

頂上をめざす途中、女性隊員の一人の両手指がかなりの凍傷にかかっていることがわかり、結局、隊長の田部井が付き添って下山した。

新たに五十二歳の男性隊員が加わり、女一人男二人の計三人がガイドと共にアタック、七、〇一〇呎の頂上に無事立つことができた。問題は、このあとである。

以前から陽気な言動が目立っていた五十二歳の隊員が、頂上直下一〇〇呎のところで、突然ビッケルを銃のように構え、ダ、ダ、ダ、ダ、……とやりはじめた。

「近づくな、オレはここで死ぬんだ」と、意味不明なことをわめきながら、雪の斜面に体ごとつっこみ、動かない。

高度障害が、このような形で現れるとは、多のメンバーも気がつかなかった。折よく、フランス人医師二人がガイドと共に上がってきた。彼らは、異常に気づき、ガイドと協力してザイルで体をしばって、この隊員を引きずり下ろしたのである。六、八〇〇呎あたりで、彼は突然正常な意識に戻り、以後自力で下山した。

仕事をやめて参加したこの登山への意気込みと無理が、異常な精神の高揚と、幻覚をもたらしただろうか。終始頭痛が絶えなかった、と後でこの隊員は述べた。

ハン・テングリでは、この夏、異常気象で有名な地元ロシア人クライマーなど十二人が死亡している。田部井隊は幸い、全員無事帰還したもの、考えさせられることが多い登山だった。

を介して松方三郎らとも親交があり、これに日大から北大に進んだ初ツアン(初見一雄)も加わる。また、部員たちの溜まり場となっていた理学部地質鉱物学科には、助手として東大から移った佐々保雄も在籍していた。慶応の大島らとも当然交友関係があった。

山岳部創設三十周年の昭和十一年には、日本山岳会から木暮理太郎を招聘して記念講演を開催した。昭和十四年には横有恒も来演している。

外国人との交流もあり、昭和二年に完成したヘルベチアヒュッテを設計したスイス人建築家M・ヒンダーや、しばしば部員と山行を共にしたA・グブラー教授らは、山岳部の重要なシンパだった。本州岳人の影響は山登りのスタイルにも現れており、特に戦前は人夫・ガイドの活用など、JAC的な面がみられた。

■特筆される吹上温泉の冬期合宿

北大山岳部の伝統の造成に大きく貢献したイベントに、創立六十余年にわたって行われている合宿がある。その代表的なものが戦前の十数年、十勝の吹上温泉で行われた冬期登山合宿だった。十二月下旬の一週間、参加者百名にもおよぶ大規模なもので、部員のほか教官、OB、非部員の学生も加わり、初年班、二年班、三年班、それ以上などの等級に分けて、氷雪技術の習得プロ

グラムが組まれた。昭和八年には参加者が最高の百十三名を記録している。

当時の部員の手で作られ、毎年改定を加えて、戦後までにわたって合宿で愛用されたという二万分の一の十勝岳付近地形図が当夜配られた。

■ベテガリ初登とイグルー

朝比奈氏の三年後輩に当たる橋本氏は三十七年の北大としての初のヒマラヤ遠征であるチャムラン遠征に至る期間の活動を、エピソードを交えて述べられた。

昭和十八年一月の今村昌耕らによるベテガリ初登までは、ひたすらベテガリの大課題に取り組んだ。昭和十五年の大遭難はその間に起こったもので、九名パーティー中の八名を雪崩で失っている。スキーを使用してコイカクシュル内沢を最後までつめようとしていたところ、沢の側面の小雪崩が引き金となって起こった大表層雪崩に巻き込まれたもので、雪崩に対する知識不足と、前述のようにスキー術への過度の依存などが反省されている。

ベテガリ初登の時には、尾根上ではテントを使用せず初めてイグルーに頼った。昭和十二年の試登の折に、尾根上でカマボコテントが破損して、ほうほうの態で逃げ帰った経験から出たもので、以後もっぱら北大の冬山のスタイルとなった。同時期にフォスコ・

マライーニが十勝岳でやはりイグルーを使ったことは後日新聞で知った。

戦後は、装備不足、経験を積んだ部員の不足などで、しばらくはOBがリーダーを務めている。吹上温泉での合宿はついに再開されることはなかったが、いくつかの記録的な山行が山崎春雄、橋本誠二らの指導の下に行われた。

新制大学への移行後、やがてマナスルブーム(北大からは山崎英雄と橋本が隊員として参加している)で部員も増加し、昭和三十一年の日高山脈全山縦走、三十六年の十隊総勢四十五名かなるパーティーによる日高集中登山など、大きな記録を残し、昭和三十七年の中野征紀率いるチャムラン遠征へとつないだ。

その間、北海道の山々にも変化があった。戦後の電源開発、木材の伐採、引き揚げ者による開拓などが日高山脈にもおよび、登山のアプローチを容易にしたが、山登りの風潮も探検的な要素は失われ、上部のみの山登り、悪場漁り、「直登沢登り」などが主流となっていた。

■締めは「山の四季」の大合唱

懇談会後半は、札幌から持参の地域限定販売の缶ビール「サッポロクラシック」をいただきながらの懇親会となった。挨拶に立たれた山田会長は謝辞のあと、ご自分も中学からの進学に

あたって、予料のあるところで山登りたいとの思いから、北大が慶応か迷った末慶応に進んだ、とのエピソードを披露されたりして、和やかな懇談となった。

席上、最近の現役部員の数は、この質問に答えて、北大のほうからは「最近減りましてね、二十数名でしようか」との答えがあり、部員不足を嘆く他大

学OBから羨望のため息がもれた。
宴の締めくくりは北大山岳部の山の歌、朝比奈氏作詞による北の山の四季を歌った「山の四季」の大合唱、「吹雪の尾根も風止みて、春の陽射しの訪れに……」で始まる軽快な四分の三拍子もまた、北大山岳部の今につながる伝統を、当夜の参会者に印象づけるに十分なものだった。図書担当理事・山本良三氏の謝辞と挨拶で閉会した。

(主席者)伊藤博夫、山田二郎、南井英弘、河野之保、渡辺兵力、大橋晋、松丸秀夫、南川金一、松田雄一、島田異、朝比奈英三、船木威志、越田和男、山本良三、岡沢佑吉、千葉重美、直田恒夫、泉久恵、平井吉夫、芳賀孝郎、木下是弥、三栖寿生、渡辺興亜、大島輝夫、原謙一、飯田進、岩瀬皓佑、大森久雄、川合周、石崎晴一郎、三好まき子、橋本誠二(以下北大OB)高田敦徳、今村昌耕、小枝一夫、松下彰夫、小西純
(越田和男)

図書紹介



平沢利夫著

『北アルプス・スケッチ山歩』

会報『山』でも何回かそのスケッチを使わせていただいた平沢利夫会員の絵が、今回一冊の本にまとめられ、長野市の出版社から発売された。ケース入りで、布張の表紙に包まれ、一枚一枚綴じられたその絵を、巧みに書き添えられた紀行文と共に味わえるのは嬉しい。

掲載されている一枚一枚の絵から、その山に登ったことのある者はその時を懐かしく回想し、登らない者にはやってみようという気を起こさせる。よい作品は作者の心と山の心が一つに融けあっている、とある山岳画家が言っていた。それがあの有名なコンプトンであったかどうかは忘れた。

山の心をどのように捉えるかは、その人の素養とか感性によるだろうし、楨さんの言う無辺際精神にも関係す

ることだろう。

一九九三年七月一日 銀河書房(〒380 長野市三輪六十七一六) 発行
一二ページ 三、五〇〇円

(岡沢祐吉)

中島博昭編著

『唄え安曇節』

だれよりも安曇野を愛した男^{しんぼ}榎葉太生

安曇野を代表する民謡として「安曇節」がある。安曇野の四季の変化と人情を巧みに織り込んだ歌詞は親しみやすく、岳人の間でもよく唄われている。

「安曇節」は医師・榎葉太生が地元の人々と一緒に、数々の野手歌や俗謡を整理したり、さらに詞を考えたりに作ったものである。その後も多くの人が参加して創られ、育まれ、生き続けてきた。その結果、詩は三千四百種にものぼり、人々の口をついて唄われる歌詞だけでも、二百にのぼるといふ。それだけに信州安曇野の人達には愛着のある歌である。そのうち六十近くは山を歌っており、岳人にも親しまれているゆえんである。

そのすべてについて、地元、安曇郡出身の中島博昭さんが「唄え安曇節」を著した。本書は「安曇節よ、永遠に……」伊藤民夫氏の巻頭の言葉に始まり、第一章、榎葉太生と安曇節の歴史、第二章、安曇節のいまは……、第三章、

唄い方と踊り方、第四章、安曇節歌詞二百選、第五章、榎葉太生の青春日記(抄)でしめくくられている。

本書には中島博昭氏や安曇節を愛する人々の思いが伝わり、安曇節の神髄の全てが語られているといつてよい。

北アルプスの田園地帯、集まった人々は「寄れや寄ってこい」のよびかけに応じて踊りの輪に加わっていく。

次から次に出てくる歌詞は、安曇野の出来事や風景を歌ったものばかり。いまでは「寄れや寄ってこい」の対象は安曇野に心を寄せる人ならばだれでもよい。この踊りの輪から生まれる

「人々の連帯と文化の華」こそが安曇節の生命であり、それはまた榎葉太生の願いでもある。そのことは正調安曇節に継承されていると著者は語っている。

一九九二年四月発行 郷土出版社
二二三ページ 一、六〇〇円

(細井澄子)

長岡忠一著

『日本スキー事始め』

——レルヒと長岡外史將軍との出会い

スキーシーズン中の週末に、越後湯沢駅周辺のにぎわいぶりを見ると、スキー人口が一千万を超えるというのも嘘ではなさそうだと思えてくる。しかし、本書によればオーストリアのレルヒ少佐の高田到着は、明治四十四年一

月五日のことであり、僅々八十年ほど前のことだから、その後の日本におけるスキーの普及ぶりはすさまじいものがある。

本書は、当時レルヒ少佐を受け入れた高田師団長長岡外史の孫の長岡忠一氏の筆になるだけに、極めてリアルに、少佐と受入れ側高田師団双方の非常な熱意によって、我が国にスキーが根をおろしていく過程がえがかれている。

しかし、それよりも興味深く読んだのは、少佐が単にスキー技術を教えるにとどまらず、積雪期登山の技術をも教え、自らもいくつかのスキー登山を試み、明治四十四年四月には、横浜在住のクラッツァー氏と富士山の九合目に達し、五月には妙高山、翌年四月には羊蹄山の登頂に成功するなど、日本の積雪期登山の歴史に極めて重要な足跡を残している点である。

日本山岳会の創立が明治三十八年であり、北海道や北アルプスの山々に大雪山山岳部が足跡を印し始めるのが大正の半ば過ぎからだから、少佐の記録には驚かされる。

このようにして我が国にもたらされたスキーが、紆余曲折をへて大ブームを迎えている次第だが、皮肉にもレルヒ少佐の志した方向とは違い、ずいぶん偏った発展をしているようだ。

スキー人口の一体何パーセントの人

書籍・雑誌 受入報告 1993年6月

著 者	書 名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
北大山の会	もうひとつのヒムルンヒマール(登山報告書)	27×19/147 pp	北大山の会	1993	著者寄贈
上村信太郎	エベレストで何が起きているか -エーデルワイスブック5-	18×12/253 pp	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
アンタークティクウォーク南極点探検隊	南極環境調査報告書(1991-1993)	26×19/354 pp	南極点探検隊	1993	発行者寄贈
平野武利	写真集・山頂にて -中央沿線・山からのパノラマ-	18×26/155 pp	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
茅野義博	写真集・高尾山 -高尾の森が帰ってきた!-	19×25/	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
安雲村教育委員会(編)	地図でみる安雲村の昔と今 -明治末期・平成全図-		安雲村役場	1993	編集者寄贈
鈴木弘道	山の高さ -測量技術発展史・標高データ-	19×14/279 pp	日本測量協会	1993	著者寄贈
不破哲三	回想の山道 -私の山行ノートから-	19×13/276 pp	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
木原浩	高山植物(山溪フィールドブックス7)	19×12/303 pp	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
小荒井実	湿原の花と山 -吾妻連峰・飯豊連峰・他-	24×18/143 pp	歴史春秋社	1993	著者寄贈
原真	頂上の旗 -生と死のあるところ-(新版)	19×14/310 pp	悠々社	1993	出版社寄贈
箕浦登美雄(編)	季刊 山の本 (第4巻)	21×15/144 pp	白山書房	1993	発行者寄贈
鷹沢のり子	山歩き始めました -初心者へのメッセージ-	19×13/261 pp	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
牧潤一	山の絵教室(楽しい独学シリーズ)	26×18/111 pp	日貿出版社	1993	著者寄贈
木原浩	尾瀬(山溪山岳写真選集)	30×22/111 pp	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
ビスタリ・トレック・オブ・ワセダ	アマの首飾り	21×21/153 pp	稲門山岳会	1993	村井葵氏寄贈
UIAA	Federacion Espanola de Montanismo (1991)	22×16/349 p-560 p	UIAA	1991	S.G.I.M.寄贈
UIAA	Federacion Espanola de Montanismo (1992)	22×16/181 p-378 p	UIAA	1992	S.G.I.M.寄贈
Pyrenaica	Vascos en el Himalaya 1974-1992	29×22/262 pp	E. M. F.	1992	S.G.I.M.寄贈
Pat Ament	Master of Rock-A Lighthearted Walk of John Gill-	24×16/193 pp	Adventure's M. P.	1992	購入
A. Salkeld & Smith	One Step in the Clouds	24×16/1056 pp	Diadem S. C. Books	1990	購入
Albi Sole	Wter Fall Ice (2nd Edition)	22×14/128 pp	Rocky Mt. Books	1988	購入
John Long	How to Rock Climb!	23×15/160 pp	Chockstone Press	1989	購入
Andrew Embick	Blue Ice & Black Gold	23×16/129 pp	Valdez Alpine B.	1989	購入
Jennifer Abromowitz	Women Outdoors -The Best 1900 Books-	27×21/179 pp	J. Abromowitz	1990	購入
David B. A. Jones	The Power of Climbing -Interviews Photography-	29×23/191 pp	Vision Poster C.	1991	購入

が山に登り、新雪を踏んだ経験があるだろう。ほとんどのスキーヤーは自然にふれ、その素晴らしさを知ることなく、リフトを降りると一目散に滑り降りることの繰り返しで、スピーカーから流れるけたたましい騒音に、梢を打つ風のうなり声を聞くこともなく、都会へ帰ってしまう。自然を押し退けて都会の設備と雰囲気を持ち込んだスキー場に人が集まり、何のために都会を離れてスキーに行くのか首を傾げてしまう。レルヒ少佐も墓の中から日本こんなスキーブームを呆れ顔で眺めているのではなからうか。

一九九二年 ベースボールマガジン社発行 (山本健一郎)

平野武利著 『山頂にて』

中央沿線・山からのパノラマ

「晴天に恵まれて頂上に立つ。スッキリ連なる山々に囲まれ、その一つ一つの山の名を親しく呼びかける」

このような書き出しでユニークな山岳パノラマ写真集が出版された。

池袋のサンシャインビル屋上からのパノラマから始まり、中央沿線の山々からの展望写真を一五〇ページ余りに

ギッシリと詰め込み、可能な限りの山名解説がふられている。個々のパノラマ写真はそのすべてがモノクロ、無限遠に近い遠くの山々までも豊麗な階調と共に小さな稜線、細かな谷筋など、もたらさず写しとっている。赤外線フィルム、フィルターを駆使した技術は、カラー写真以上に山の色感を表現している。さらに驚くべきことに、平野氏は既成のカメラの性能にあきたらず、二台の手作りカメラで撮影されていることである。

かつて三水会の席上で見せていただいたこのうちの一台、サンシャイン90は木製革張りのボックスカメラ、温かい血の通った手触りを感じさせられ、著者の専門印刷写真技術をさても、その情熱、意欲を十分に表現されたと思える。

山頂に立っていきなり「あの山は？」と聞かれ、戸惑うことの多い私どもにとって、ガイドブックの代わりにもなり、中高年登山者にとっては特に貴重な写真集である。山を愛え、場所を変えての続刊が期待される。

一九九三年六月二十日 山と溪谷社刊 B5判横開き 一五五ページ
定価二、三〇〇円 (勝田房治)

次代に残そう美しい山と溪

日本山岳会蔵山岳地図目録 5 ヒマラヤ(5)

A官製 B個人、団体 aシリーズ b単作 c付録 d概念図 eその他

分類番号	発 行 者	発行年	地 図 名	縮 尺
A 3-3 a	Survey Department of Nepal	1987	NEPAL Administrative	1 : 2,000,000
B 3-3 b	NEPAL by T. Hagen	1961	Nepal Reliefkarte	1 : 1,408,000
A 3-3 a	Survey Department of Nepal	1985	GEOLOGY OF NEPAL	1 : 1,000,000
A 3-3 a	GSGS	1953	NEPAL EAST WEST SHEET	1 : 506,880
A 3-3 a	do.	1953	NEPAL WEST EAST SHEET	do.
A 3-3 a	Survey Department of Nepal	1985	NEPAL WESTERN SHEET	1 : 500,000
A 3-3 a	do.	1985	NEPAL CENTRAL SHEET	do.
A 3-3 a	do.	1985	NEPAL EASTERN SHEET	do.
B 3-3 d	地形図研究グループ 岳人 238 号	1967	ネパールヒマラヤ 8 西部・カルナリ地域	1 : 250,000
B 3-3 d	do. 岳人 235 号	1967	ネパールヒマラヤ 6 西部・カルナリ地域	do.
B 3-3 d	do. 岳人 234 号	1967	ネパールヒマラヤ 5 西部・ガンダキーカルナリ地域	do.
B 3-3 d	do. 岳人 233 号	1967	ネパールヒマラヤ 4 中部・ガンダキ地域	do.
B 3-3 d	do. 岳人 231 号	1967	ネパールヒマラヤ 2 東部・コシ地域	do.
B 3-3 d	do. 岳人 230 号	1967	ネパールヒマラヤ 1 東部・コシ地域	do.
B 3-3 d	MANDALA MAPS	1971	TREKKING MAP POKHARA TO JOMOSOM	1 : 126,720
B 3-3 d	do.	1971	TREKKING MAP KATHMANDU TO POKHARA	do.
B 3-3 d	do.	1971	TREKKING MAP KATHMANDU, GOSAINKUNO	do.
B 3-3 d	do.	1971	TREKKING MAP LAMOSANGU TO MT. EVEREST	do.
B 3-3 a	J. Tyson RGS	1967	KANJIROBA HIMAL	1 : 150,000
B 3-3 d	H. Gurung	1968	ANNAPURNA AND DHAULAGIRI HIMAL	1 : 250,000
B 3-3 d	薬師義美 関西登山会	1971	DHAULAGIRI HIMAL AND ITS ENVIRONS	1 : 100,000
B 3-3 d	American Himalayan Exped. 1959	1960	MUKUT HIMAL AND ENVIRONS	1 : 200,000
B 3-3 c	川喜田二郎 山岳 54 年	1959	ROUTE MAP OF JAPANESE SCIEN. EXPED. 1958	C 1 : 40,000
B 3-3 d	薬師義美	1965	NORTH OF ANNAPURNA	1 : 150,000
B 3-3 d	薬師義美	1965	TILITSO LAKE	C 1 : 100,000
A 3-3 b	GSGS	1953	マナスル山群 GSGS シートより拡大	C 1 : 50,000
B 3-3 b	日本山岳会マナスル登山隊	1956	Mt. MANASLU	1 : 50,000
B 3-3 b	慶応大学隊	1964	HIMALCHULI	1 : 50,000
A 3-3 b	GSGS	1953	カトマンズ盆地周辺	1 : 10,000
B 3-3 a	E. Schneider	1974	LAPCHI KANG	1 : 50,000
B 3-3 a	do.	1968	ROLWALING HIMAL	do.
B 3-3 a	do.	1974	DUDO KOSH	do.
B 3-3 a	do.	1974	SHORONG/HINKU	do.
B 3-3 a	do.	1965	KHUMBU HIMAL	do.
B 3-3 b	RGS	1961	Mt. EVEREST REGION	1 : 100,000
B 3-3 b	RGS	1975	Mt. EVEREST REGION	1 : 100,000
B 3-5 b	RGS	1925	Mt. EVEREST AND GROUP OF CHOMO LUNGMA	1 : 63,360
B 3-5 b	中国科学院蘭州氷川凍土沙漠研究所	1977	MAP OF MOUNT CHOMOLANGMA REGION	1 : 50,000
B 3-3 b	B. Washburn National Geographic Society	1988	MOUNT EVEREST	1 : 50,000
B 3-3 b	RGS	1935	THE NORTHERN FACE OF MOUNT EVEREST	1 : 25,000
B 3-3 b	E. Schneider DAV, OAV	1957	CHOMOLONGMA-MOUNT EVEREST	1 : 25,000
B 3-3 b	B. Washburn SSAF	1991	EVEREST AREA	1 : 25,000
B 3-4 b	東部ネパール学術調査隊 山岳 59 年	1964	NORTH-EASTERN PART OF NEPAL HIMALAYA	1 : 100,000
B 3-4 b	SSAF	1950	JONGSANG-NUPCHU	1 : 150,000
B 3-4 b	SSAF		SHIKKIM HIMALAYA	1 : 150,000
B 3-4 b	K. Wien DAV, OAV	1932	KARTE DES ZEMU-GLETSCHERS	1 : 33,333
B 3-4 d	吉沢一郎 岩と雪 26 号	1972	THE KINGDOM OF BUTAN	C 1 : 666,000
B 3-4 d	M. Ward RGS	1966	NORTH WEST BHUTAN	1 : 250,000
B 3-5 b	中国地図出版社	1990	NAMCHA BARWA MOUNTAINEERING MAP	1 : 50,000
B 3-6 b	中国科学院蘭州氷川凍土研究所	1983	GLACIAL TOPOGRAPHIC MAP OF Mt. BOGDA	1 : 50,000

★会報 No 565. '92. 年 6 月号掲載のヒマラヤ(4)に続くものです。

・会務報告

七月定例理事会

日時 七月八日(木) 十八時四十分

〃二十一時

場所 日本山岳会会議室

出席者 藤平会長、中村副会長、小倉、大森、大倉、村井、山口、松浦、南井、中川、水野、渡辺、溝口、伊藤、堀井、各理事、斎藤、宮下、重廣、神崎各常任評議員、川崎監事

〔委任〕 鴨原副会長、片岡、山本、大谷各理事、西村、湯浅各常任評議員、中島監事

◆議事

〔審議事項〕

一、ナムチャバルワ写真展の写真パネルについて 小倉

読売新聞社文化事業部から写真展終了後、写真パネルの取扱について問い合わせがあった。資料委員会としては、会が引き取り、ルームに場所がないので、大町山岳博物館か松本アルプス山岳館に委託したい。

(交渉の結果、松本アルプス山岳館に決定した。)

二、東宝東映映画「クリフハンガー」チャリティー試写会について 小倉
カナディアンロッキーを舞台にした山岳救助映画(十二月公開)のチャリ

ティーショウを主催で開催し、社会貢献しないかとの話があった。十月末に支部集会、十二月四日に年次晩餐会があるので、お断りする。

三、雪岳山(韓国)国際交流環境体験登山、後援について 神崎

HATJで、九月二、六日、日本、

韓国、中国、中華台湾四カ国の青少年を募集して体験登山と環境シンポジウムを行うが、会の後援をお願いしたい。

田部井、重廣会員がシンポジウムに参加する。

四、キルギスタン偵察隊派遣について (青年部) 村井

九月に二名派遣したい。交渉の窓口として、韓国西洋環境開発に窓口業務を委託したい。

五、海外登山基金委員会について 小倉

会報九月号に海外登山基金の募集を載せるので、高所担当理事は九月理事会までに、海外経験者の委員を委員長と相談の上選任してほしい。

六、マカールのチベット側登山許可申請について 渡辺

高所委員会(七月六日審議)では、九十周年記念事業として登山許可申請をしたい。会長①現在、募金にたいする社会環境が余りにもきびしい。②北面の登山ルートの調査研究。③登山料の金額、隊の規模などを検討の上、中

止することもある。この三点を考慮に入れ、登山申請をする。

〔報告事項〕

一、ヤルツァンボ川探検隊(三月理事会で後援を承認)の隊長変更 小倉

会長が中村進会員から渡辺純一郎氏に変更になった。

二、会員募金について 大倉

四月一日〜六月三十日で三二〇万二〇〇〇円の募金があった。

三、「山岳」編集内容について 南川

ナムチャバルワ報告を収録する。

四、秩父宮記念学術賞について 松浦

五月理事会でお話しした鳥居亮会員の「自然エネルギー利用の実験」を申請する。

◎新入会員承認 田中清隆他二十八名

〔各委員会報告〕

●自然保護委員会 ①松丸委員の要望により山本氏から渡米中の岡島委員に依頼して、自然保護関係の洋書約四十冊を手配。代金はライオンズクラブからの予算で支払い、管理は図書管理委員会にお願いする。②四カ国語による「登山マナーパンフレット」の件。文章は完成したが、環境庁の予算の関係で発行は年末となる。そこで夏山に間に合うように、本会で簡単なパンフレットとして印刷し(三万部)、中国、韓国、及び松本、富山に配布し、これを雛形に各地で活用してもらうことと

した。経費は約十五万円。予算の出所は未定。七月十五日ごろ完成する。

●自然保護専門委員会 岡島委員の帰国に合わせ、第一回の会合を行い、山のレッド・データブックの作成とウオッチを行うなどの計画案を決めた。

●科学研究委員会 青年部と共同で行った「マッキンリー」は全員登頂して、六月二十九日に帰国。観測器は四分の三が倒壊。データログも四台中一台のみ記録が残っていた。解析を急いでいる。

●図書委員会 七月六日の委員会で追加文化活動として、「山の本シリーズ、山岳書、古本屋の舞台裏」について、小林静生氏(新小岩駅前小林静生書店店主)に講演をお願いする(お知らせ欄参照)。

●青年部 マッキンリー隊壮行会(六月二日)、谷川岳合宿(六月五、六日)講話「マカール山群を巡る山」立教大学OB中山氏(七月七日)。

●資料委員会 小原晴子会員から絵画一点「針の木岳雪溪」(茨城猪之吉作品)の寄贈を受けた。近日ルームに展示。

●フィルム・ビデオ委員会 撮影会を十月十六、十七日、中央アルプス宝剣岳で行う予定。一般募集三十名。

◇◇◇◇◇

次回理事会 九月九日(木) 十八時三十分より、日本山岳会会議室

委員会運営方針

◆図書管理委員会

①カード方式からパソコン方式へ移行して蔵書整理をする。この作業期間は約二年だが、長期的には検索システムを採用する計画である。

②不要な図書を処分する。重複本のほか、当図書室蔵書として不適当な本を整理処分する。これは図書室が手狭になり、新図書の受け入れ・整理が困難になっているためである。(水野勉)

◆山岳研究所運営委員会

①山研の良好な活用方法を考える。

②各支部、各委員会、各同好会、各会員に活用をPRする。

③冬季対策や雨季対策などの未整備部分の工事を実行する。

④初年度の利用状況と管理運営の分析。

⑤開所時・閉所時のマニュアルの検討。

⑥毎月一回の委員による巡回と点検。

◆自然保護委員会

(溝口洋三)

本年から活動をよりアクティブにやりやすいよう体制を変え、「自らの活動実績で対外発言力を増す」という方針ですめる。やるべきことは多いが、全てには力が届かないので、各委員のやりたいテーマを中心に部会を作り、主体性を持って動くことで活動の効率を

あげ、やるべきことの一部分なりとも満たそうと考えている。部会の例(かっこ内はリーダー)をあげると①ミニコミ部会(近藤緑)②海外文献部会(松丸秀夫)③子供の自然保護教育部会(市川義輝)④定点観測部会(木名瀬亘)⑤現察山行部会(横山隆)⑥森部会(伊藤敏)⑦鳥海山部会(松本恒広)

(大森弘一郎)

◆自然保護専門委員会

日本山岳会としてやらねばならない活動は多い。このため自然保護委員会と協力・補完しあい、会の活動範囲と活動実績をふやす目的で、新たに「自然保護専門委員会」を設置した。

やりたいことは多いが、今年は次の二テーマを中心にすすめる。

①日本アルプスの自然保護重要地点を選び、数年の長期にわたって空陸からその変化をウォッチし、対策を打ち出す。

②若年の自然保護指導者の養成を行う。これには約二十名を山岳会内外から選び、座学および現地で地形・地質・動植物などの指導を行う。

当委員会の委員は少数だが、プロジェクトごとに広く協力者を求めすすめる考えなので、ご協力をお願いしたい。

(大森弘一郎)

◆総務委員会・集会委員会

総務委員会と集会委員会は、その性格上、錯綜している部分があるが、こ

れからは明確に仕事を分けていきたい。

今回は総務委員会とは別に、各委員

会の実務者によって構成される連絡会を設けた。当面は九十周年の準備が目

標であるが、日本山岳会全体の問題に

対しても、意見交換をしていきたいと思

っている。それと同時に、各委員会

間のコミュニケーションを十分に図る

意味からいっても、有意義な会にした

い。

(中川 武)

◆科学委員会

当委員会の委員は三十五名である

が、定例委員会(毎月第四水曜日)の

常時出席者は十名前後である。今後の

活動の活発化のために、若い会員の参

加とフレッシュなアイデアが切望さ

(松浦祥次郎)

◆学生部

学生部としては、内輪だけでまと

まってしまうのではなく、加盟してい

る大学同士が交流できるように、その

中心的な役割を果たしたい。また、各

(山本宗彦)

ルーム日誌

(6月)

1日	学生部
5日	総務委員会
6日	図書委員会 高所委員会 アル
7日	青年部
8日	常務理事会 理事会
12日	資料委員会 アルパイン・スキークラブ
13日	フィルム・ビデオ委員会 二火
14日	山研委員会 総務委員会 集会
15日	自然保護委員会 学生部
19日	資料委員会 総務委員会
20日	フィルム・ビデオ委員会 アル
21日	パイン・スケッチクラブ
22日	学生会
23日	青年部
26日	資料委員会 連絡委員会
27日	フォトビデオ委員会 自然保護
28日	委員会 青年部
30日	科学委員会 総務委員会 集会
30日	アルパイン・フォトビデオクラ

7月来室者 557名



☎ 3234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

◆山の本のシリーズ (一) 講演会

図書委員会

テーマ 山岳書・古本屋の舞台裏

講師 小林静生

日時 十月二十八日(木)六時半

場所 山岳会ルーム

本シリーズ (二)、(三)と続く予定

◆全国支部大会

錦繡の奥秩父・木暮理太郎翁を偲んで

山梨支部

平成五年度の全国支部大会は、秩父

の増富温泉郷で開催されます。ふるっ

てご参加ください。

日時 十月二十三日(土)二十四日(日)

場所 山梨県北巨摩郡須玉町・増富

温泉郷

日程 二十三日 ●受付 午後一時

～四時 同温泉郷不老閣(大

会本部) ●前夜祭 午後五時

～九時 増富小学校体育館

(開会式 講演会)二十四日 ●

登山 ①瑞牆山②散策コース

(金山平) ●木暮祭 午後二

時より金山平の木暮翁碑前で

参加費 一七、〇〇〇円

申込

●九月三十日までに申込用紙

等を各支部事務局(支部所属

会員)または本部事務局(支

部不所属会員)で受けとり、

参加費を振り込んでくださ

い。振込先は申込用紙に記載。

〒400甲府市青沼三二一十四

(株)エンドー内・日本山岳会山

梨支部事務局 電話〇五五二

一三三〇六六六 土日夜間

〇五五二一三三〇六六八一

FAX・〇五五二一四一五

二六五

◆「彩画山影」出版記念

松田敏男 山の版画・絵画展

日時 九月二十四日(金)十月九日(土)

十時三十分～午後六時三十分

(日曜休廊)

場所 ギャラリー百号(東京都渋谷

区宇田川町三一五―四 オー

クワイレッジ F1 電話〇

三三四九六一九五一七

◆山の自然学現地講座

自然保護委員会

東京学芸大学・小泉武栄先生を講師

に、木曾駒ヶ岳で開催します。

日時 十月二日(土)三日(日)

十月二日午後二時 しらび平

駅集合(飯田線駒ヶ根駅から

バス一時間) 千畳敷カール

山頂一帯を観察し、三日午後

二時現地解散

参加費 二、〇〇〇円(交通費・宿泊

費別 ただしテント・自炊も

可)

申込 葉書で日本山岳会・自然保護

専門委員会・河西瑛一郎宛

先着二〇名まで(ただし一〇

名以下の場合中止)

◆二王子岳親睦登山会

越後支部

二王子岳は蒲原平野に面した信仰の

山として親しまれてきた山です。山麓

の二王子神社から二王子岳(一、四二〇

m)頂上往復は約七時間の行程です。

日時 十月十六日(土)十七日(日)

集合 十六日午後四時 羽越線新発

田駅前 月岡温泉に宿泊

参加費 一、〇〇〇円(一泊三食)

申込 葉書で日本山岳会越後支部宛

(〒951新潟市営所通一番町

学生書房方) 先着七十名まで

(担当 山田 勲)

◆ナムチャバルワとマッキンリーの

気象報告会

科学研究委員会

昨年登頂に成功したナムチャバルワ

登山隊の気象とマッキンリー・デナリ

峠に設置した気象観測器械の状況・結

果について報告会を開催します。

日時 十月十六日(日)午後一～五時

場所 山岳会ルーム

報告

①ナムチャバルワの気象と天

気図解析 奥山巖

②ナムチャバルワBC、C3の気

象観測と天気予測 飯田肇

③マッキンリーの気象観測 大蔵喜福

◆秋の撮影会

フィルム・ビデオ委員会

中央アルプス宝剣岳周辺で撮影会を

行います。稜線の山荘に一泊。夕景と

朝日をねらい、千畳敷で紅葉を撮る予

定です。

日時 十月十六日(土)泊り十七日(日)

集合 十六日午後二時 駒ヶ岳ロー

プウェイ山頂駅待合室

参加費 一〇、〇〇〇円(一泊二食、

保険料。交通費別)

申込 葉書に氏名、住所、電話番号、

会員番号、生年月日を記入し

フィルム・ビデオ委員会宛。

締切十月五日 定員(三十名)

になり次第締め切ります。参

加者には詳細要項を返信。

◆自然保護に関する図書紹介の集い

自然保護委員会

本会図書室に山の自然保護関係の洋

書五十四冊が入りました。岡島成行会

員が渡米中に選んでくださったもの

で、書籍名は次号会報(五八一号)の

「図書・雑誌受入報告」に掲載の予定

です。この書籍の紹介を行いますので、

ご参集ください。

日時 十月二十二日(金) 午後七時
場所 山岳会ルーム

◆山の破壊を見る―武甲山

自然保護委員会

奥武蔵の名山「武甲山」(一三三六m)は全山石灰岩の山であるために、切り崩され、今は見る影もない姿になっています。山頂から作業現場を見て考えてみたいと思います。

日時 十一月十四日(日)

コース 西武池袋―西武秩父―タクシ

ー生川―武甲山―飯盛山の

頭―浦山口―生花畑―西武秩

父―西武秩父(歩程約五時間)

集合 西武秩父駅九時(西武池袋駅

七時十六分発・特急西武秩父

平成五年度「海外登山基金」助成登山計画募集

海外登山委員会

平成五年度の海外登山基金による助成登山計画の募集を左記の通り行います。ふるって応募ください。

記

対象 平成六年二月一日～平成七年一月末に出発する登山隊。会員の推薦があれば、隊の規模の大、小は問いません。

行き、または七時三十分発

レッドアロー号に乘車のこと

参加費 約二、五〇〇円(交通費、保

険料)

申込 葉書に氏名、住所、電話番号、

会員番号、生年月日を記入し

自然保護委員会宛 締切十一

月五日。電話による申し込み

はお断りします。

◆「マッキンリー気象観測プロジェクト」山岳自然保護活動」基金のため

ヒマラヤ大型絵葉書を頒布

科学研究委員会

自然保護専門委員会

「マッキンリー気象観測プロジェクト」

は、マッキンリー頂上直下に気象観測

申込方法 所定の様式(本会事務所

に請求してください)に記入

し、登山計画書(十五部)を

添付して申請してください。

申込締切 平成五年十二月末日

審査ならびに交付の時期 平成六年

一月中旬に審査を行い、二月の

理事会で決定し、二月中旬～

三月末までに交付します。

なお、交付金額は二五〇万円

(金利の低下により平成五年

度予算計上額より減)

装置を設置し、山岳気象の実態をつか

み、今後の登山の安全に役立てようと

いうもので、本年六月にも設置に登っ

てきました。「山岳自然保護活動」は、

登山者個人による小さな破壊から、開

発行為による大きな破壊まで、様々な

問題に対して、終りのない種々の活動

を考えています。これらの活動のため

の基金として、ヒマラヤの大型絵葉書

を頒布し、利益の全てをこのプロジェ

クトに活用することとしています。

で、ご協力をお願い申し上げます。

●大型ポストカード(ヒマラヤ空中散

歩・エベレスト、マカル・等九座、撮

影・大森弘一郎)十枚組二、〇〇〇円

(税込) ●申込/日本山岳会事務局に

ご送金くだされば発送いたします。

◆「山岳総合索引」購入のおすすめ

「山岳総合索引」が完成しました。「山

岳第一年第一号」(一九〇六年「明治三

九年)から「第八十五年」(一九九〇年)

まで全一四三冊の索引です。

①山名・山域名・地名 ②個人名・

団体名 ③事項名の三部からなり、登

山記録や登山コース、会員動向、民族、

歴史、地理その他「山岳」収録のすべ

ての記事を容易に検索することができます。

残部数に限りがありますので、

早い機会にお申し込みください。

特例として、平成六年三月末までの

期間内、三回の分割払いも可とします。

●会員特別価格一八、〇〇〇円(市販

価格二七、八〇〇円) ●均等三分割

払い(一回六、〇〇〇円、期間内の随

時三回払い)

●申込/日本山岳会事務局(送金は郵

便為替または現金書留) (大森久雄)

■会員異動

▼物故 渡辺宏之(七九七四) 5・6・29

▼退会 パラディーブ(九五八四) 5

・7・31 篠塚貞雄(六一三八) 5・7・

31 サウアー(一〇八五四) 5・7・31

仙土俊一(九七〇〇) 5・7・31 ▼改

姓 田畑昌子(二〇〇八七) 堀田昌子

▼終身会員 松本宏(七五六九)

■訂正 五七九号(八月号) 十九ペー

ジ除籍者を除籍予定者、五五八七慶応

大学を鹿児島大学に。五七八号(七月

号) 十八ページ新人会員(復活) 1

993年2月を5月に。お詫びして訂

正いたします。

日本山岳会会報 山 580号

1993年(平成5年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102 東京都千代田区四番町

5-4 サンビュウハイツ

四番町

TEL 東京(03) 3261-4433

振替口座 東京 3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 技報堂